

プラハ言語学サークルの 第1, 第2テーゼ

(The First and Second of The Ten Theses Presented By The Prague Linguistic Circle)

飯 島 周

Summary

This paper is to examine the first two theses presented by the Prague Linguistic Circle in 1929, which give us the clue to the theoretical basis of the so-called Praguian functionalism.

To make the ideas of the Circle clearer, the two theses are translated from the Czech original into Japanese.

In the first thesis, language is defined as a functional system with purposefulness and the necessity of synchronistic structural comparison is pointed out.

In the second thesis, the methodology of functional linguistics is discussed and tasks of synchronistic phonology, linguistic onomatology, functional syntax and morphology in the wider sense are explained.

Key words: linguistics, language, functionalism, Prague School.

〈はじめに〉

本稿は、標題通りの内容で、飯島（1987）、（1988）に直接連結するものである。すなわち、1929年プラハで開催された第1回スラヴ学者国際会議に、プラハ言語学サークルの名で提出された10項のテーゼの最初の2項を、チェコ語の原文⁽¹⁾から日本語への翻訳の形で検討しようとする試みである。

本稿で扱う部分は、“言語”に対するこのサークルの基本的認識の提示で、それ以下のテーゼ各項の土台となるものである。それぞれの標題および小見出しを一見すれば明らかなように、第1項では言語を機能的体系として定義し、方法論的に重要な、当時としては革新的な提案がなされている。すなわち、当時全盛であった通時的な系統的比較方法と対比される、共時的な構造的比較方法の主張である。第2項では、言語体系の各レベル、すなわち音声面、単語と単語統合などについての研究法の要点が述べられ、いわゆる機能言語学の方向を示している。これらはさらに発展して、より綿密な方法論的体系となり、1930年代のプラハ学派の隆盛を呼んだ。

テーゼ全体の検討は、このサークルのテーゼ特別委員会が行ったが、Vachek（1970）によれば、テーゼの第1項および第2項a）の起草者はR. Jakobson、第2項b）はV. Mathesiusである。この両者、特に前者はよく知られているが、その著作の多くにテーゼとの関連が見られるのは当然であろう。

本稿の注および参考文献の部分には必要と思われるもののみ記したが、テーゼの全体的構成や総合的な文献については、前述の飯島（1987）、（1988）を参照下されれば幸いである。なお、参考のために、注の中で原語、仏訳、英訳、独訳を何ヶ所か示したが、これはそれぞれ、Vachek（1970）、Brun（1929仏訳）、Vachek（1983英訳）、Scharnhorst（1976独訳）からの引用である。

〈プラハ言語学サークルのテーゼ 第1項〉

体系としての言語という概念から生ずる方法論的諸問題とスラヴ諸語にとってのこの概念の意義

（共時論的方法と通時論的方法に対するその関係、構造的比較対系統的比較、各種言語現象の発展の偶然性又は規則的一致性）

a) 機能的体系としての言語の概念

人間的活動の結果としての言語は、その活動と目的性を分かち合っている。言語を表出⁽²⁾として分析しようが伝達として分析しようが、話し手の意図が最も明白で最も自然な説明となる。そのため、言語の分析の際には、機能的立場が尊重されるべきである。**機能的立場から見れば、言**

語とは目的を持つ表現手段の体系である⁽³⁾。いかなる言語現象も、それが依存する体系を考慮することなしには理解し得ない。スラヴ言語学も、この諸問題の実際的な複雑さを避けることはできない。

b) 共時論的方法の諸課題：通時論的方法に対するその関係

言語体系の本質と性格は、今日の諸言語の共時論的分析によって最もよく認識することができる。それらの諸言語だけが唯一完全な資料を提供し、直接に経験できるものである。スラヴ言語学の最も实际的でありながらしかも最も閑脚されている課題は、そこで、今日のスラヴ諸語の言語性格学⁽⁴⁾の設立である。このような手続きを経なければ、スラヴ諸語のより深い研究は全く不可能である。

機能的体系としての言語という概念は、過去の諸段階の研究の際にも尊重される必要がある—たとえそれらの再構成に関してであろうとも、発展の確認に関してであろうとも。共時論的方法と通時論的方法の間には、ジュネーヴ学派がなすように、越えられぬ境界を置くことはできない⁽⁵⁾。共時的言語学では言語体系の諸要素がその機能の見地から評価されるべきであるなら、言語における諸変化も、これらの変化に従う体系を考慮することなしには判断できない。言語的諸変化が単に目的なしの攪乱的干渉であり、体系的な見地とは異質のものにすぎないと想定するのは非論理的であろう。言語的諸変化は、しばしば体系の安定化、再構成などに対する考慮を持つ。そこで、通時の研究は、単に体系およびその機能を除外しないばかりか、逆にこれらの概念なしでは不完全なものになる。

一方、共時的な記述も、発展という概念を完全に排除することはできない⁽⁶⁾。なぜなら、共時的にとらえられた時間の部分にさえ、消えつつあったり、現存したり、現れつつあったりする諸段階の認識が存在するからである。すなわち、古風な表現として経験される文体論的な諸要素や、さらに、生産的な形態と非生産的な形態の区別⁽⁷⁾は、共時的言語学から取り除き得ない通時論的な諸現象の証拠である。

c) 比較的方法を用いることの新しい可能性⁽⁸⁾

現在までのところ、スラヴ諸語の比較的研究は、系統的な諸問題だけに、とりわけ共通な諸要素の要約に限られていた。しかし、比較的方法は、もっと広範囲に用いなければならない。それは、言語体系とその発展の構造的法則性を発見するのに適する方法である。このようなタイプの比較にとって役に立つ資料としては、親近性がないか又は単に遠い親近性しかない、その構造が最も大きく異なっている諸言語ばかりでなく、同一の語族の諸言語、たとえばスラヴ諸語も存在する。それらの諸言語は、その歴史的発展の中で、本質的な数多い一致を背景にしながらも、鋭い相違を示している⁽⁹⁾。

親近性を持つ諸言語の構造的比較の結果

スラヴ諸語の発展の比較的研究が一步一步取り払っているのは、これらの諸語の歴史の中で示された、集束的および拡散的な発展の偶然的で付随的な特色についての想定である¹⁰⁾。この種の研究は、集束的および拡散的な個々の諸事実の間の、法則的な結びつきを明らかにする。

このような研究によって、スラヴ諸語の発展は、そのタイポロジー、すなわち相互に関連する一連の諸変化の、一つの全体への要約に到達するであろう。

一方では一般言語研究のための貴重な資料を生みながら、他方では個々のスラヴ諸語の歴史を内容豊かにしながら、このような発展の比較的研究は、個々の孤立的な諸現象の歴史についての実りなき虚構的な方法を決定的に排除し、それぞれの言語の発展の基本的傾向を明確にし、相対的な年代学の原理のより効果的な使用を可能にするが、それは、記念碑的な記録¹¹⁾から汲み取られる間接的な年代学的資料よりも信頼できるものである。

地域的グループ¹²⁾

さまざまな時代における個々のスラヴ諸語の発展における諸傾向の発見と、これらの諸傾向をスラヴ諸語および非スラヴ諸語を含む隣接諸語（たとえばフィノウグール諸語、ドイツ語、起源を問わずバルカン諸語）の発展の諸傾向と対比させることは、さまざまな規模の地域的グループ*に関する重要な諸問題の総合のための資料を提供する。それらのグループに、個々のスラヴ語はその歴史の発展の過程で参入して来たのである。

d) 各種言語現象の発展の規則的一致性

諸現象の発展の科学的研究（歴史的言語研究もそれに属するが）においては、今日、偶発的に生ずる諸現象という概念は——たとえ後に首尾一貫して現実化されようとも——諸現象の発展における規則的一致性（法則的発生）という概念に道を譲っている。それゆえ、文法のおよび音韻的变化の説明においても、収束的発展の理論が、機械的で偶発的な拡大という概念を押さえつつある。

その理論の結果：

(1) 言語的諸現象の拡大に対して

影響を受ける言語組織を変化させるような言語現象の拡大も、機械的に起きるのではなく、受入れる側の意向によって決定される¹³⁾が、その意向は、発展の傾向との一致で明確になる。その理論によって、具体的な場合に、共通な焦点から広がって行く変化なのか、又は収束的な方向への発展から生ずる現象なのかという論議は、基本的な意味を失う。

(2) **共通基語⁽¹⁴⁾の解体の問題に対して**

その理論によって、共通諸語の解体の問題の意味も変る。共通基語の統合のための基準は、諸方言が共通の変化をどの程度に経験し得るか、というその尺度である。その収束性が一つの焦点から発するのか又は否かは付随的で解決困難なものである。収束が拡散を支配する限り、慣習的に共通基語を前提とするのが好都合である。この立場から、スラヴ共通基語の解体についての問題をも解決することができる。ここで用いられた言語的統合の概念は、もちろん単に、歴史的な研究のために限定された補助的な方法論的な概念であり、応用的な言語学⁽¹⁵⁾にとっては適切である。応用的な言語学においては、言語的統合という規準はその言語に対する話し手の集団の関係によって与えられ、客観的な言語的諸特徴によって与えられるものではない。

〈プラハ言語学サークルのテーゼ 第2項〉⁽¹⁶⁾

言語体系、特にスラヴ語の体系の検討課題

a) 言語の音声面についての研究

音響学的側面の意義

音韻論的諸現象の目的性の問題は、必然的に次の結論に通ずる：すなわち、これらの諸現象の外部的な面の検討の際には、まず第一に、音響学的な観点からそれらを検討することが必要である。なぜなら、話し手はこの点に関して音響学的な観念を持つが、調音運動的⁽¹⁷⁾観念は持たないから（たとえばチェコ語の [ř]、ロシア語の [ɣ] などの調音⁽¹⁸⁾におけるさまざまな詳細点は、音響学的な結果が同一の場合には問題にならない）。

客観的物的事実として、観念として、機能的体系の構成要素として、音声を区別することの必要性⁽¹⁹⁾

主観的な音響的・調音運動的諸観念を、機械による客観的な音響学および調音運動的諸条件の形で登録することは、言語的諸価値の客観的相関関係の指標として貴重である。しかし、これらの客観的な諸条件は、言語学とは間接的な関係しか持たず、それゆえ、言語的価値と同一視されてはならない。

しかしながら、主観的で調音運動的な諸観念も言語体系の要素となるのは、ただ、与えられた言語体系内でそれらが意味を区別する機能を果す範囲内のみである。それらの音韻的要素の感覚的な内容は、それらの要素の体系内における相互関係（**音韻体系の構造的原理**）に比較すれば本質的なものではない。

共時的音韻論の基本的課題

1. 音韻体系の特性を記述すること、すなわち、所与の体系で意味を持つ形態を形成する最も単純な音響的・調音運動的な諸観念（音素⁽²⁰⁾）の総体を確定する必要がある；その際、諸音素間の関係を特定化すること、すなわちその体系の構造的パターンを確定することが必要である；特に重要なのは音韻的相互関係の意味形成的な各種の相違の特別なタイプを限定することである。音韻的な相互関係を形成するのは、対立的な音素のペアの一連で、それらの音素は、これらのペアのそれぞれから抽象されて考えられ得る、同一の原理に従って区別される（たとえば、ロシア語においては次のような相互関係がある：（母音の）ダイナミックな強勢 \leftrightarrow 無強勢、（子音の）有声 \leftrightarrow 無声、（子音の）軟音 \leftrightarrow 硬音；チェコ語においては：（母音の）長 \leftrightarrow 短、（子音の）有声 \leftrightarrow 無声⁽²¹⁾）。

2. 次の事項の決定が必要である—それらの音素の理論的に可能なすべての結合に対して、与えられた言語において**現実化される音素の結合**⁽²²⁾、それらの音素のグループ化における順序の変異と、それらの結合の範囲。

3. それらの結合が用いられる程度、それらの音素とそれらの音素のさまざまな範囲での結合が現実化される密度⁽²³⁾も確定されねばならない；同様に、与えられた言語における、さまざまな音素と音素の結合の機能的負荷も検討されねばならない。

4. 言語学、特にスラヴ言語学の重要な問題は、**音素的な相違の形態的利用**である（**形態音素論**、又は略して**形音素論**⁽²⁴⁾）。単語の形態的な構造の諸条件に応じて、同一の形態素の内部で相互に交換可能な二つ又はそれ以上の音素の複合観念、すなわち**形態音素**⁽²⁵⁾は、スラヴ諸語において本質的な役割を持っている（たとえば、ロシア語には、*ruk/č*の中に形態音素 *k/č*がある。すなわち *ruka*（名）、*ručnoj*（形）⁽²⁶⁾）。

必要なことは、それぞれのスラヴ語又は方言にとっての形態音素のすべてと、それらの形態音素が形態素の内部で取り得る位置を正確に共時的に確定することである。

スラヴ学の緊急の問題は、すべてのスラヴ語とそれらの方言において、特徴的な音素論的および形態論的な記述を実行することである。

b) 単語と単語の結合について⁽²⁷⁾

言語的命名单位についての科学⁽²⁸⁾——単語

機能的な立場から言えば、**単語**とは、**命名という言語行為の結果**であるが、この行為は、時には統合（統語論）的行為と区別されずに混同されることがある。話し言葉を客観的な機械的な事実として分析して来た言語研究は、しばしば、単語の存在を完全に否定した。しかしながら、機

能的な観点からすれば、たとえさまざまな言語においてさまざまな明暗度で現れており、単に潜在的な事実であろうとも**単語の自立的存在は全く明らかである**。命名の行為によって、言語は、外部的であろうが内部的であろうが、具体的であろうが抽象的であろうが、現実を言語的に捕捉できる要素に分析する。

どの言語もそれ自身の命名の体系を持っている：各言語はさまざまな命名の形式を用いるが、それはさまざまな明暗度、たとえば単語の派生、単語の複合、さらに強固な単語的結合においてである（スラヴ諸語において、特に民間常用語²⁹では、新しい名詞は、多くの場合、派生によって作られる）。各言語はそれ自身の命名的な分類を持ち、それ自身の特性的な語彙を形成する。命名的な分類は、まず、単語的カテゴリーの組織に現れるが、その規模、決定性および内部的相互関係を、各言語について特別に研究する必要がある。それに加えて、個別的な単語的カテゴリーの内部にも、分類的な相違が存在する：たとえば名詞の場合には文法的性、活動性³⁰、数、限定性の段階などのカテゴリー；動詞の場合には態、体³¹、時制などのカテゴリー。

言語的命名についての科学は、部分的に、伝統的な語形成論（語幹派生論³²）、およびいわゆる狭義の統語論（単語の種類と形式の意味についての研究）と同じ言語現象を分析するが、機能的な概念は、分離された諸現象を結合させること、個々の言語組織の体系を確定させること、そしてより古い方法では単に示唆するのみであった領域、たとえばスラヴ諸語における時制形式の機能についての説明を可能にする。

言語的命名による形式の分析と命名的な分類では、特定の言語における語彙の特徴はまだ十分に確定されない。そのような性格学のためにさらに必要なのは、一般的な言語的命名および個別的な特定の命名的カテゴリーについて、平均的な範囲と平均的な意味の確定を研究すること、語彙の研究の中で、特に明確に提示される概念的領域の確定、一方では言語的情緒性、他方では言語の高度の知性化³³の役割の記述、研究される語彙の補充方法（たとえば外国語の命名単位形式の借用によるか翻訳によるか）の確認など、すなわち、いわゆる意味論によって処理される現象の研究である。

組織的統合についての科学³⁴——単語の結合（統語論）

単語の統合は、固定的な結合でなければ、**組織的統合行為の結果**である。もちろんこれは又、時によって単独の単語の形式で現れることもある。**基本的な組織的統合行為**、そして同時に実際の文形成行為は**叙述³⁵**である。それゆえ、機能的統語論は、まず第一に、叙述の諸タイプを研究するが、その際、文法的主語の形式と機能をも観察する。主語の機能を最もよく明らかにするのは、文をテーマと陳述³⁶に分析する実勢的文構成³⁷と、文法的主語と述語に分析する形式的文構成との比較である；たとえば、チェコ語における文法的主語は、フランス語又は英語における文法的主語のようにテーマ的ではないこと、そして、チェコ語における実勢的文構成は、テーマと

陳述の機械的でない語順を利用して、テーマと文法的主語の間の葛藤を解決可能にするが、他の諸言語では他の方法で、たとえば受動態を用いること⁽³⁸⁾などにより解決していること。

機能的概念は、**個別的な統語論的諸形態の相互関係を認識することを可能にし**（前述の、文法的主語のテーマ的性格と受動態の叙述の発展との関係を参照）、それによって、それらの体系的な整合性と集中性を認識することを可能にする。

形態論（単語および単語グループの形態組織についての科学⁽³⁹⁾）

単語の諸形態と単語グループの諸形態は、言語的命名および組織的統合という言語的行為により生じているが、言語における形式的な諸性格の体系にグループ分けされる。これらの体系を研究するのは、もちろん、より広い意味での形態論である。これは言語的命名単位および組織的統合の両科学と並列的な学科（伝統的な語幹派生論、形態論、統語論）として並ぶのではなく、両科学を通じて流れるものである。

形態論的体系の形成の傾向は整合性について二つの方向を持つ：一方では、形式的な体系の中で、機能に応じてさまざまな形態を維持するが、それらの中には同一の意味の担い手が示される。他方では、さまざまな意味の担い手としての諸形態を維持するが、それらは同一の機能によって決定される。各言語にとって、特別に、これらの両方向に向う力とその範囲を決定すること、およびそれらによって支配される諸体系を整備することが必要である。

形態論的な諸体系の性格学においては、個別的な諸機能の表現における分析的および総合的原理の力と範囲の確定が必要である⁽⁴⁰⁾。

(注)

- (1) Vachek (1970) pp. 35~42.
- (2) 原語は *výraz*, 仏訳・英訳 *expression*, 独訳 *Ausdrucksstätigkeit*. 言語の機能を表出と伝達に大別するのは一般的傾向であろう。
- (3) このサークルの目的論的主張はよく知られており、話し手の立場が重視されている。
- (4) 原語は *lingvistická charakteristika*. 仏訳 *les caractéristiques linguistiques*, 英訳 *linguistic characterologies*. これは言語的諸特性の体系的記述と理解できる。
- (5) F. d. Saussure を代表とする、いわゆるジュネーヴ学派とプラハ学派の類似点がよく指摘されるが、ここでは明確な相違点が述べられている。なお、Saussure (1916) は F. Čermák によって1989年チェコ語に訳された。
- (6) このサークルの一つの主張は、言語現象におけるダイナミズムであり、共時的言語体系を静的に、又は固定的に考える傾向とは異なる。
- (7) この問題は、接辞に関して典型的に見られる。
- (8) これは、当時の主流であった通時的系統的比較方法、又はいわゆる比較言語学に対抗する新しい主張であり、注目すべきものであろう。
- (9) この分析の方法は、言語性格学や一般言語学、さらに対照言語学や類型論と呼ばれるような分野に発

展した。

- (10) いわゆる歴史的研究が、個々の言語現象の発展を偶発的なものとして処理する傾向があったのに対する批判である。
- (11) 原語 *památky*, 仏訳 *monuments*, 英訳 *literary monuments*。英訳形が意味としては明確であろう。
- (12) 原語 *oblastní skupiny*。仏訳では *groupes territoriaux* であるが、*印の位置では異なる形《*unions régionales*》になっている。おそらくその影響であろうか、英訳では *regional unions*, 独訳では *regionale Gemeinschaften* とされている。後に独語 *Sprachbund*, チェコ語 *jazykový svaz* が生じ、わが国では「言語同盟」という訳語があるが、これもそれらの訳の影響であろう。しかし内容的に考えると「同盟」という日本語は適切ではないかも知れない。いずれにせよ、この概念は、地域的な言語接触、又は言語圏の問題を考察する場合に有用であろう。系統の異なる隣接諸語が、構造的・意味的に類似する表現を持つことは明白である。たとえばチェコ語の *mit rád* と独語の *gern haben* など。
- (13) 注(3)参照。
- (14) 原語 *prajazyk*, 仏訳《*langue commune initiale*》, 英訳 *protolanguage*。従って「祖語」という訳も可能であるが、意味的に明確なのは仏訳であろう。
- (15) この用語は現代的な意味の「応用言語学」を示すものではない。
- (16) 具体的な言語体系をどのように設定し、どのように分析するかについての提案であり、それぞれの研究分野の問題点が指摘され、このサークルの方法論が特に集中的に示されている項と考えられる。
- (17) 原語 *motorický*, 仏訳 *motorice*, 英訳 *organogenetic*。すなわち「どのように発音器官が動いて音を出すか」に関する形容詞である。
- (18) チェコ語の [ř] の調音の位置が人によってさまざまであることがよく指摘されるが、多くの場合、伝達の障害にはならない。これは特に目立つ例であるが、同様な現象は日常的に多く見られる。なお、仏訳にはカッコ内の部分が欠けている。
- (19) 音声面の各レベルの分離が研究上必要であることは現在では常識的と思われるが、当時としては革新的だったであろう。実際に *TCLP 1.* のテーゼに続く論文 (Zur allgemeinen Theorie der phonologischen Vokalsysteme) の冒頭で、Trubetzkoy も *Phonetik* と *Phonologie* の区別を力説している。
- (20) 原文の構文上、ここでは複数2格形の *fonémat* になっている。単数1格は *fonéma*, 仏訳は *phonèmes*。なお、この語を「音韻」と訳すのは、用語上の混乱を招くおそれがあるように思う。
- (21) これらはいずれも示差的特徴として認識され得ると同時に、それぞれの言語の特性とも関係する。たとえばロシア語の母音は、強勢によって基本的音価がかなり影響を受けるが、チェコ語の場合はその影響がほとんどない。
- (22) これがその言語の基本的形態素の体系となるであろう。
- (23) 原語 *hustota*, 仏語 *densité*, 英訳 *density*。
- (24) 原語 *morfofonologie* および *morfonologie*。
- (25) 原語 *morfonéma*。この種の要素を認めることには異論があるかも知れない。
- (26) この例の関係はチェコ語でも同じである—*ruka* (名), *ruční* (形)。
- (27) この部分、すなわち第2テーゼのb)は、Mathesiusの著作の一部とほぼ一致する。この点については飯島(1991)を参照されたい。又、Mathesius(1961)には、これらの問題が具体的に論じられている。
- (28) 原題 *Nauka o jazykovém pojmenování*, 仏訳 *Theorie de la dénomination linguistique*, 英訳 *Theory of linguistic onomatology*。原題の最後にある *pojmenování* は、動詞から源生した名詞で「命名の行為」および「命名の単位」を示し得る。従って、ここで提示されているのは単なる語彙論ではない、と理解し得る。
- (29) 原語 *řeč lidová*, 仏訳 *langage populaire*, 英訳 *substandard varieties*。これは *spisovný jazyk* (「標準文語」) と対比されるものである。詳細な点は飯島(1988)を参照されたい。
- (30) 原語 *životnost*, 仏訳 *animé*, 英訳 *animateness*。スラヴ諸語において、男性名詞内部の区分に重要な概念である。

- (31) 原語 *vid*, 仏訳および英訳 *aspect*。スラヴ諸語の動詞にとっては決定的な重要性を持つ。英語などでは時制的に表現される部分(完了形, 進行形など)に対応する場合が多く, 理解しにくい点がある。
- (32) 原語 *kmenoslovi*。ただし仏訳・英訳・独訳ともに省略してある。この語は語幹 (*kmen*) を中心に単語の派生的形成を論ずることを意味し, 独語では *Stammbildungslehre* で示される。
- (33) 言語組織が持つ情緒性と知性化の関係は第3テーゼにも述べられており, 言語には単なる認知面の分析だけでは処理できない部分があることを示唆する。
- (34) いわゆる機能言語学 (*funkční lingvistika*) の中心課題で, このサークルの業績の中でも重要な部分と思われる。
- (35) 原語 *predikace*, 仏訳 *predication*, 英訳 *predication*。
- (36) 原語 *thema* と *výpověď*, 仏訳 *thème* と *énonciation*, 英訳 *theme* と *enunciation* [*rheme*]。Vachek (1983) によれば, 現在では *theme* と *rheme* (英訳形) の方が適切である。この用語は J. Firbas によって導入された。
- (37) 原語 *aktuální členění věty*, 仏訳 *division actuelle de la proposition*, 英訳 *functional analysis of the sentence*。これも多様な訳し方ができるが, 最もよく知られている形は, 英語の *functional sentence perspective* (= FSP) であろう。プラハ学派のこの研究は Mathesius 以来の伝統を持ち, 大きな成果を上げている。最近の例としては Sgall et al (1986), Firbas (1992) があり, 特に後者は, この方面の第一人者の研究の集大成とも言うべき内容である。なお, 前者では FSP の代わりに TFA (=topic-focus articulation) を用いている。
- (38) この例は英語によく見られる。Mathesius (1961) 参照。
- (39) 以下の記述に示されるように, この用語の意味は伝統的なものとは異なる。
- (40) 分析と総合という原理による説明は, 一般的な立場で承認され得るが, 言語の性格学的特徴としても理解しやすいかも知れない。形態と機能および意味については Mathesius (1961) 参照。

参考文献

- Brun, L. (1929仏訳) "Thèses présentées au Premier Congrès des philologues slaves" *TCLP I* pp. 33—58.
- Firbas, J. (1992) *Functional sentence perspective in written and spoken communication*. Cambridge.
- 飯島 周 (1987) 「プラハ言語学サークルの第10テーゼ」『跡見学園女子大学紀要』第20号。
 ♪ (1988) 「プラハ言語学サークルの第3テーゼ」『跡見学園女子大学紀要』第21号。
 ♪ (1991) 「第1回スラヴィスト会議に提出された「テーゼ」と V. Mathesius の「機能言語学」」『西スラヴ学論集』Vol. 2.
- Mathesius, V. (1961) *Obsahový rozbor současné angličtiny na základě obecně lingvistickém*. Praha. (邦訳) 飯島周 (1981) : マテジウス『機能言語学』東京 桐原書店。
- Saussure, F. d. (1916) *Cours de linguistique générale*. Paris. (邦訳) 小林英夫 (1972) : ソシユール『一般言語学講義』東京 岩波書店。(チェコ訳) Čermák, F. (1989): *Kurs obecně lingvistiky*. Praha.
- Scharnhorst, J. (1976独訳) "Thesen des Prager Linguistenkreises zum I. Internationalen Slawistenkongreß." Scharnhorst & Ising (1976) *Grundlagen der Sprachkultur Beiträge der Prager Linguistik zur Sprachtheorie und Sprachpflege*. Berlin. pp. 43-73.
- Sgall, P.; Hajčová, E.; Panevová, J. (1986) *The Meaning of the Sentence in Its Semantic and Pragmatic Aspects*. Prague.
- Vachk, J. (ed.) (1970) *U základů pražské jazykovědné školy*. Praha.
 ♪ (ed.) (1983) *Praguiana Some Basic and Less Known Aspects of the Prague Linguistic School*. Amsterdam & Philadelphia.
 ♪ (1983英訳) "Theses presented to the First Congress of Slavists held in Prague in 1929." Vachek (1983) pp. 77-120.